

令和 5 年 8 月 3 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01056

研究課題名（和文）未刊の日記類に見るウィーンの19世紀前半における舞台芸術の歴史的変遷

研究課題名（英文）Historical transformations of early nineteenth-century performing arts in Vienna as seen in unpublished diaries

研究代表者

Gerald Groemer (Groemer, Gerald)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：50303392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：この3年間、コロナ禍のため計画したウィーンでの調査を行うことが不可能であった。そのため、できる限りインターネットを通して史料を集め、それを分析した。また現地の図書館と資料館からも史資料を取り寄せ、郵送してもらった。それらを翻刻、分析、解説し、論文3編と単著1冊を刊行した。2023年に科学研究費の一年延長を希望したものの、延長希望先の山梨大学は原則として退職教員に対して研究環境を継続して提供することが困難であること、また一身上の都合により海外引越をせざるを得なくなったことから、獲得した金額のほとんどを返還することとなったが、十分な成果をあげたものとする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は十八世紀のウィーンの音楽事情の分析・解説を目指した。研究成果は3篇の学術論文と1冊の単著で発表した。とくに単著は一般読者向きのものであり、広く読まれることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：For the past three years, it was impossible to conduct the planned research in Vienna due to the Corona pandemic. Instead of going to Vienna, I collected historical documents through the Internet. I also ordered historical documents from Viennese libraries and archives by mail and analyzed them. On the basis of these materials I wrote and published three scientific articles and one book. I hoped to receive one-year extension of the Grant-in-Aid for Scientific Research in 2023, but I was forced to return most of the money I had received due to the fact that the University of Yamanashi, where I requested the extension, has difficulty providing a research environment for retired faculty members and that I had to move overseas for personal reasons. Although this was a disappointing case for me, I believe the outcome of my research was satisfactory.

研究分野：音楽史

キーワード：ウィーン 音楽史 ヨーロッパ文化史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は未刊の日記類を主な材料と見なし、それに即してビーダーマイヤー時代におけるウィーンの舞台芸術の展開を具体的かつ実証的に解明し、ウィーンがヨーロッパの舞台芸術の中心地にまで成長するほどの歴史的過程を総合的に分析することを主たる目的とした。

19世紀初頭までウィーンの舞台芸術はパリ、ローマ、ロンドンなどと比較して必ずしも最も優れているとは言いがたい。ところが19世紀以降、いくつかの劇場とホールが整備され(例えば1822年のヨーゼフシュタット劇場の改築・拡張、1838年以降のレオポルドシュタット劇場の大幅な改築など)すでに1812年に創立されたウィーン楽友協会とウィーン楽友協会音楽院(現 Konservatorium der Gesellschaft der Musikfreunde、現ウィーン国立音楽大学)の活動が本格的に軌道にのり、1842年にはウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(Wiener Philharmoniker)の母体となった帝国王立宮廷歌劇場(現ウィーン国立歌劇場)のオーケストラが設立された。同時代には著名な劇作家と役者の台頭も目覚ましく、とくにF. ライムンド(Ferdinand Raimund, 1790年生～1836年没)、J. ネストロイ(Johann Nestroy, 1801年生～1862年没)、F. グリルパルツァー(Franz Grillparzer, 1791年生～1872年没)は現在にもよく上演される戯曲を作りあるいは自ら役者として活躍している。1830年代以降、ショパン、シューマン、ブラームズなど数多くの著名な音楽家がそれぞれの故郷・活躍地を離れてウィーンを訪れ、あるいは移り住んだ。ヨーロッパ諸国を取り巻く長年に続く戦争が終わり、ウィーンに平和が戻ると様々な芸人が大道を舞台となし、ポピュラーなジャンルを発展させ、セレナード、「夜の音楽」(Nachtmusik)、辻芝居などの諸ジャンルが花を開いた。これによってウィーンは次第にヨーロッパの舞台芸術の中心地とまで発展する。

この変遷過程は、芸能に還元できない歴史的に変化する社会が育んだ政治的、経済的、文化的、思想的な環境によって大きく左右されていた。ナポレオンが南大西洋の孤島セントヘレナ島に幽閉され、王政復古のため市民の自由の夢が破れ、社会の閉塞感が増加し、メッテルニヒが主導する新秩序が構築されることにより、舞台芸術も新時代に突入した。この変遷過程は多くの日記類に記述されているが、これらの貴重な史料に即してそれを具体的に解明することは、従来の研究では充分になされていない。舞台芸術が社会の中にどのように展開し、逆に前者は社会にどのような影響を及ぼしたのかを解き明かすことにより、はじめてウィーンの文化の成立と展開のプロセスが明らかにされると思われる。

ビーダーマイヤーの舞台芸術、とりわけ音楽に関する優れた先行研究は当然非常に豊富である。しかし、その大半は特定の作曲家、劇作家、演奏家などを研究対象としている。例えば音楽の分野ではRichard Rickett 著、*Music and Musicians in Vienna* (1973年)をはじめ、Charles Osborne 著、*Schubert and his Vienna* (1985年)、David Wyn Jones 著、*The Symphony in Beethoven's Vienna* (2011年)などはこの時代を取りあげる代表的な研究といえよう。また貴重な情報も例えばHenry-Louis de La Grange, *Vienne, une histoire musicale* (Paris: Fayard, 1995年)、Julia Bungardt 他編、*Wiener Musikgeschichte*, (Wien: Böhlau, 2009年)、Elisabeth Th. Fritz-Hilscher, Helmut Kretschmer 編、*Wien, Musikgeschichte* (Wien: Lit, 2011年)などに含まれ、R. Flotzinger 編、*Österreichisches Musiklexikon* (全5巻、2006年完成)にも19世紀ウィーンにおける舞台芸術に関する項目が含まれている。また例外ではあるが、Alice M. Hanson 著、*Musical Life in Biedermeier Vienna* (1985年)(喜多尾道冬、稲垣孝博共訳『音楽都市ウィーン、その黄金期の光と影』、1988年の和訳あり)は19世紀前半の音楽文化全般の歴史を述べているが、氏は主に新聞など、現在インターネットでも簡単に入手できる資料しか駆使しておらず、目撃者が残した未刊の日記類はほとんど視野に入れていない。

研究代表者も2015年以降、ウィーン会議にまつわる音楽文化に関する学術論文を5遍発表し、1814年～1815年ウィーンに集まったヨーロッパ諸国の国王、外交官、軍司令官などが経験したコンサート、歌劇上演などをなるべく具体的に把握することに努めてきた。

## 2. 研究の目的

以上述べた舞台芸術と政治・経済との相互関係を把握するためには、日記類が最も役立つ史料のひとつであると考えられる。日記を書いた者の多くは舞台芸術に大きな関心を抱きながらも職業的な作曲家、劇作家、役者、演奏家などではなかったため、舞台芸術の歴史的変遷をより多角的、客観的に観察したと思われる。「部外者」として活躍した彼らは様々な立場から、市民の日常生活、物価の動向、噂とデマ、事件、社会交流、流行現象などあらゆる社会的現象を記し、広い視野から舞台芸術を取り巻く経済的、政治的、社会的、文化的環境を記録していることが大きな特徴である。また一般的な芸能史にはめったに姿を表さないポピュラー舞台芸術についても貴重な情報を提供してくれる。

ところが、ウィーンの舞台芸術の社会的、経済的、政治的背景を物語る日記類の多くは現時点では未刊・未翻刻であり、それを芸能史・文化史の研究で活かす作業は緒についたばかりである。新資料の発掘、解読、翻刻の作業を進めることも残された大きな課題である。この作業によって、個別の人物の伝記、諸ジャンルの独自の展開、諸様式の分析などを試みる従来の研究とは異なり、総合的にウィーンで展開されたビーダーマイヤーの舞台芸術の変遷過程をより明らかにすることができる。

新しく発掘、解読、翻刻、分析、活用された史資料により、従来の研究では十分に解明されてこなかったウィーンの舞台芸術と19世紀前半の社会、政治、経済との相互関係がより具体的にかつ実証的に把握することが可能となり、本研究の創造性はそこにも認められる。また19世紀前半ウィーンで見られる舞台芸術の歴史の変遷は単に一都市の固有の現象ではなく、類似する過程は全世界に見られるので、都市文化の発展の比較検討の材料としての役割も期待できる。

### 3. 研究の方法

19世紀前半のオーストリアでは、諸芸能の商品化と商業化が著しく進み、それにより舞台芸術を育んだ者の社会的地位が急速に変化し、この変化によって新しい芸術的可能性が生み出された。この諸変化は日記類の史料に如実に反映され、資料を入念にひもとくことにより、また当時刊行された新聞、公記録、事典類、参考書、小説著などと比較しながら、芸術と社会の相互関係の輪郭を研究期間内に明らかにすることが十分に可能であると考えられる。

19世紀前半のウィーンの実態を伝える最も重要な未刊・未翻刻の日記類のひとつに、ウィーン図書館（Wien Bibliothek）所蔵のマティアス・ペルト（Matthias Franz Perth）の日記がある。政府の役人であったペルトは、ウィーンの舞台芸術のあらゆる面に深い関心を寄せ、若いころには劇作家、歌手、役者としても多少活躍した者であった。彼は生涯を通して日記を書き続け、最終的に58冊に及ぶ1803年から1856年の年代にわたる大著を後世に残した。20,000頁ほどにおよぶ手書きのテキストに加え、計566点のプログラム、演劇のピラ、サーカスなどの広告など様々な新聞記事の切り抜きも折り込みとして張り付けられた。研究代表者はすでに平成26～30年度に行われた基盤C（一般）の研究の遂行にあたってこの日記の一年間分

（1803年～1815年）を写真撮影、解読、分析し、それに基づき5編の学術論文を作成・発表してきた。しかし、2019年度までに行われた研究の本題は主に18世紀後半からウィーン会議（1815年）の音楽文化の解明に絞ったため、舞台芸術全般の分析は行っていない。本研究では、研究代表者はまずペルトの日記の1815年以降の年代を写真撮影、解読し、そこに記されているウィーンの舞台芸術に直接的・間接的に関わる項目を抽出・分析し、論文作成に活用する計画である（日記の写真撮影は許可済みである）。

またビーダーマイヤー時代の舞台芸術の変遷を総合的に把握するためには、他の日記類を発掘・解読することも不可欠である。幸いにもウィーン図書館、オーストリア国立図書館、ウィーン市立文書館などには本研究に役立つと思われる19世紀前半に作成された未刊、未翻刻の日記類が多く所蔵されている。その代表的なものとしてはレオポルドシュタット劇場を経営したW.ミュラー（Wenzel Müller、1759年生～1835年没）の18巻に及ぶ日記であり、あるいはピアノ教師としてヨーロッパ中に名前を轟かせたJ.フィッシュホフ（Joseph Fischhof、1804年生～1857年没）などがあげられる。それに加えて、既刊の史資料としては劇作家のF.グリルパルツァーの手記、画家のE.パウエルンフェルド（Eduard Bauernfeld、1802年生～1890年没）の日記などが本研究のためにとくに貴重で興味深い情報を提供している。加えて当時の逐次刊行物（多くの場合はすでに電子化され、オンラインで検索することは可能である）も本研究にとって欠かせない史資料である。未刊の日記類に合わせて以上の資料を入手、解読、分析すれば、ビーダーマイヤー時代のウィーンの舞台芸術の変遷と社会的変化全般との関係を総合的かつ実証的に明らかにした。

### 4. 研究成果

この3年間、コロナ禍のため計画したウィーンでの調査を行うことが不可能であった。そのため、できる限りインターネットを通して史料を集め、それを分析した。また現地の図書館と資料館からも史資料を取り寄せ、郵送してもらった。それらを翻刻、分析、解説し、以下の論文3編と単著一冊を刊行した。

2020年 “Musikleben in Wien, 1812-1814: Auszüge aus den Tagebüchern des Mathias Perth” マティアス・ペルトの日記に見られるウィーンの音楽事情(1812年～1814年), 『山梨大学教育学部紀要』31:175-214.

2021年 “Musikleben in Wien, Januar 1815 bis Oktober 1818: Auszüge aus den Tagebüchern des Mathias

Perth,” マティアス・ペルトの日記に見られるウィーンの音楽事情(1818年～1820年10月), 『山梨大学教育学部紀要』, 32:174-214.

2022年 “Musikleben in Wien, November 1818 bis 1820: Auszüge aus den Tagebüchern des Mathias Perth,” マティアス・ペルトの日記に見られるウィーンの音楽事情(1818年～1820年10月), 『山梨大学教育学部紀要』, 33:139-178.

2023年 『「音楽の都」の誕生』岩波新書

2023年に科学研究費の一年延長を希望したものの、延長希望先の山梨大学は原則として退職教員に対して研究環境を継続して提供することが困難であること、また一身上の都合により海外引越をせざるを得なくなったことから、獲得した金額のほとんどを返還することとなったが、十分な成果をあげたものとする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 ジェラルド・グロマー	4. 巻 33
2. 論文標題 マティアス・ベルトの日記に見られるウィーンの音楽事情（1818年10月～1820年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 139-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ジェラルド・グロマー	4. 巻 32
2. 論文標題 マティアス・ベルトの日記に見られるウィーンの音楽事情（1815年1月～1818年10月）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 175-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ジェラルド・グロマー	4. 巻 31
2. 論文標題 マティアス・ベルトの日記に見られるウィーンの音楽事情（1812年～1814年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 175-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ジェラルド・グロマー	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波新書	5. 総ページ数 254
3. 書名 「音楽の都」の誕生	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------